

12月7日 待降節黙想会講話

テーマ:『私たちに対する神の慈しみの深さ』

待降節の静けさの中、夙川教会の皆様と黙想の時を持てることを心より感謝いたします。今年の降誕節中に希望の聖年が締めくくられます。また、明日は「無原罪の聖母」の祭日です。神が人となられ、私たちのもとへ来てくださった出来事を思い起こすこの季節、私たちは「神の慈しみの大きさ」に改めて心を向けたいと思います。

世界には、クリスマスを中心から待ち望む国々があります。フィリピンでは、なんと8月頃から準備が始まると聞きました。彼らが待っているのは、飾りつけや雰囲気以上に、「神様との出会い」です。神は想像を超える愛をもって私たちを包み、どんな弱さも、貧しさも、罪さえも抱きしめてくださいます。イエスは、聖ファウスチナに「慈しみは神様の最高の特徴である」と告げられました。私たちが弱ければ弱いほど、神様はより深く私たちと関わり、近づき、救おうとしてくださいます。

その慈しみがどのように働くのか、三人の姿を追ってみましょう。

まず、十字架上の「善き盗賊」ディスマスです。彼は人生の最後に「わたしを思い出してください」とイエスに願いました。ディスマスの受けた返事は「今日、あなたはわたしと一緒に楽園にいる」という驚くべきものでした。神様の慈しみには、遅すぎるということがありません。

次に、今年、列聖されたカルロ・アクティス。普通の少年でありながら、「ご聖体は天国への高速道路」と語り、日々ミサとゆるしの秘跡にあずかりました。病の中でも、教会と教皇のために自らを捧げ、まっすぐに神様へ向かって歩み続けた青年です。

そして、6歳半で帰天したアントニエッタ・メオ。彼女は105通の手紙をイエス様に書き、「あなたの腕の中に私をお任せしたい」と繰り返していました。その幼い心を満たしていたのは、神様の限りない慈しみでした。

私たちが神様の慈しみに応える道は、二つあります。第一に「秘跡」。秘跡は、神様の力が具体的に働く場です。随分前、ある高齢の男性に病者の塗油を受けた際、それまで激しい怒りに覆われていたその方の表情が一瞬で和らぎ、深い平安に包まれました。秘跡を通して神様の慈しみに触れたのです。

第二に「祈り」です。祈りとは多くを語るのではなく、信頼と謙遜をもって神様に自分を差し出すことです。ディスマスの最期の一言がその典型です。私たちも、自分の弱さを隠さず、イエス様に助けを求めるとき、神様の慈しみに包まれます。

「無原罪の聖母」の祭日にあたり、マリアの姿を仰ぎたいと思います。マリア様は神様の慈しみの傑作であり、いつも私たちを導いてくれる母です。マリア様に、私の心を神様の慈しみで満たしてくださいと、ご一緒にお祈りいたしましょう。